

I 研究の概要

1 研究主題

自分の考えを互いに分かりやすく伝え合う子供の育成
～「対話的な学び」に重点を置いた複式国語科学学習指導を通して～

2 研究主題設定の理由

(1) 背景

これからの社会においては、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えて加速度的に進展し、今の子供たちはこれまでよりもますます複雑で予測困難な時代を生きていかなければならないと言われている。

こうした変化の激しい社会の中では、様々な変化に積極的

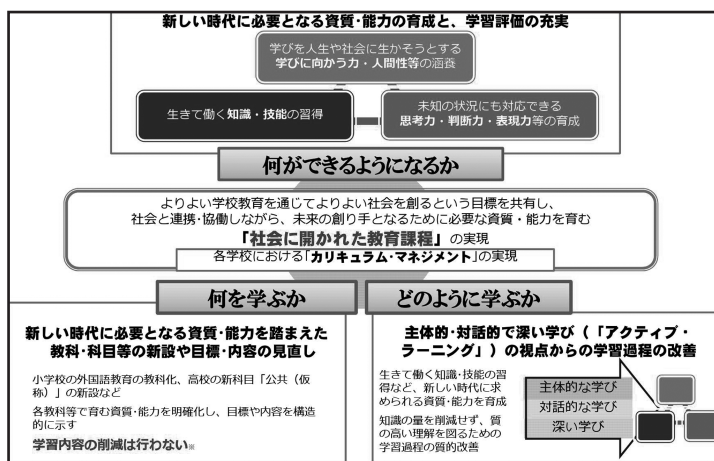
に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、再構成するなどして新たな価値につなげていくことが求められている。学校教育には、子供たちが学習を人生や社会と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯に渡って能動的に学び続けることができるよう、「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」といった学習者である子供の目線の授業改善が求められる（資料1）。

本校では、次のように学校教育目標、目指す子供像と二つの重要指導事項を設定し、日々授業改善を図っている。

学校教育目標	心豊かで すすんで学び たくましく 生きる力を備えた宇宿っ子の育成
目指す子供像	自分の考えをしっかりとち、交流を通して、自分の考えを広げたり深めたりする子供
重点指導事項	○ 一人一人が分かる授業と生きる力を育む学習指導の充実 ○ 複式学級の特徴を生かした学習指導法の研究・改善

平成15年度からは、県総合教育センターの研究提携校として、複式学習指導についての研究・実践をしている。平成27年度からの3年間の算数科の研究では、話し手と聞き手が考えをつなぎ合い、共に創り上げていく対話的な発表の仕方等について研究してきた。平成30年度の外国語活動の研究では、コミュニケーションスキル等について研究・実践を行ってきた。これまでの研究を通して、子供たちは話し手と聞き手の重要性を理解し、自分の考えを意欲的に説明することができるようになってきた。

また、複式学習指導におけるガイド学習の進め方を身に付けた子供たちが増えてきている。一方で、話合いが形式的なやり取りに終始することもあり、自分の考えを上手に表現できず、互いの考えを広げたり深めたりすることが十分でないという課題も明らかになってきた。



【資料1】学習指導要領の方向性

「平成28年度文部科学白書」より

(2) 研究の方向

ア 分析

資料 2 から、次のようなことが分かる。

質問事項①から、自分の考えをうまく伝えることに課題があると感じている子供が多い。

質問事項②③から、他者の意見を理解したり、それぞれの意見のよさを生かしてよりよい考えをつくり出したりすることに難しさを感じている子供が多い。さらに、これら

の課題は、国語科の学習においても、同じことが言える（質問事項④）。

質問事項⑤から、各教科等の学びを、他教科等や日常生活へ生かそうとする意識が薄い子供が多い。

質問事項	割合※ ¹ (本校)	割合 (全国)
① 自分の考えがうまく伝わるよう工夫して発表しているか。	60%	62.5%
② 話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり深めたりすることができるか。	60%	74.1%
③ 互いの意見のよさを生かして解決方法を決めているか。	60%	74.0%
④ 国語の授業で自分の考えを表現するとき、うまく伝わるように工夫しているか。	40%	58.5%
⑤ 授業で学んだことを、他の学習に生かしているか。	40%	83.9%

※ 1 質問で「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」を選択した子供の割合

【資料 2 平成 31 年度全国学力・状況調査児童質問紙】

イ 考察

これらのことから、本校の課題解決を図るために、国語科で「自分の考えを互いに分かりやすく伝え合う」ために必要な言語能力を育成し、他教科等や日常生活に広げていくことにした。そのため、自分の考えを形成し、話し合いを通して自分の考えを広げたり深めたりすることに不可欠な「対話的な学び」に重点を置いた授業づくりを行うことが大切だと考え、本研究主題を設定した。

3 基本的な考え

(1) 研究主題の捉え方

ア 「分かりやすく伝え合う」とは

子供が良好な友達関係を築きながら、相手の考えとその理由を理解したり、自分の考えとその理由を明確にして表現したりすること

自分の考えを相手に分かりやすく伝えるためには、一方的に自分本位で伝えようとしてもうまく伝わらない。話し手、聞き手のどちらの立場でも、相手を理解し、その状況を踏まえて伝えたり、受け取ったりすることが大切である。

イ 「対話的な学び」とは

子供が自分なりの考えを形成し、話し合いを通して、自分の考えを広げたり深めたりする学び

右のように、自分の考えを広げたり深めたりするには、自分の考えと比べながら他者の考えを理解することが必要である。そのためには、自分の考えをもち、他者に伝わるように表現したり、他者の考えだけでなく、理由を理解したりすることが大切である。

考えを広げる	考えを深める
自分の考えになかったものを受け入れて、自分の考えに生かすこと	自分の考えを基に、多様な観点から自分の考えを見つめ直すこと

(2) 研究の視点

ア 【視点１】について

【視点１】 「対話的な学び」に重点を置いた国語科授業づくり

新学習指導要領においては、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うこととしている。「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」は、それぞれが関連し合い、一体となって実現されるものであるが、本校の課題との関連がより深い「対話的な学び」に重点を置いた授業改善をしていくことで、三つの学びがバランスよく実現され、本校の課題解決につながると考える。

イ 【視点２】について

【視点２】 複式学級の特徴を生かした指導の充実

複式学級では、異学年が同一の教室で学習するため、「直接指導」と「間接指導」を組み合わせる必要があり、間接指導時の指導を充実させることが重要である。そのため、教師は学習内容を指導するだけでなく、「どのように学ぶか」という「学び方」をより意識して指導する必要がある。本校では特に、話し合いで互いに分かりやすく伝え合うことに課題があり、「対話的な学び」の充実を図ることが、課題解決につながると考える。

(3) 研究の全体

【今日の教育的課題】

- ・ 急激な社会変化の中を生き抜き、未来の創り手となるための汎用的な資質・能力の育成

【新学習指導要領】

- ・ 「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」のバランスのとれた育成
- ・ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善とカリキュラムマネジメント
- ・ 言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力の育成

【学校教育目標】 心豊かで すすんで学び たくましく生きる力を備えた宇宿っ子の育成

【目指す子供像】 自分の考えをしっかりとち、交流を通して、自分の考えを広げたり深めたりする子供

- 【重点指導事項】
- 一人一人が分かる授業と生きる力を育む学習指導の充実
 - 複式学級の特徴を生かした学習指導法の研究・改善

【これまでの研究】

- ・ 算数科において、話し手と聞き手が考えをつなぎ合い、共に創り上げていく対話的な発表の仕方等の研究
- ・ 外国語活動における、コミュニケーションスキル等の研究

【子供の実態】(○成果, △課題)

- 話し手と聞き手の重要性を理解し、自分の考えを意欲的に説明できるようになってきている。
- 複式学習指導におけるガイド学習の進め方が身に付いてきている。
- △ 自分の考えを上手に表現できない。
- △ 互いの考えを広げたり深めたりすることができない。
- △ 間接指導時の話合いの在り方に課題がある。
- △ 学びを他教科等や日常生活に生かそうとする意識が薄い。

研究主題

自分の考えを互いに分かりやすく伝え合う子供の育成

～「対話的な学び」に重点を置いた複式国語科学習指導を通して～

【視点1】

「対話的な学び」に重点を置いた国語科授業づくり

- (1) 単元を通した取組
 - ア 課題解決の過程となる言語活動
 - イ 思考を促すツール
- (2) 1単位時間を通した取組
 - ア 考えの形成
 - イ 考えの共有
 - ウ 考えの自覚化

【視点2】

複式学級の特徴を生かした指導

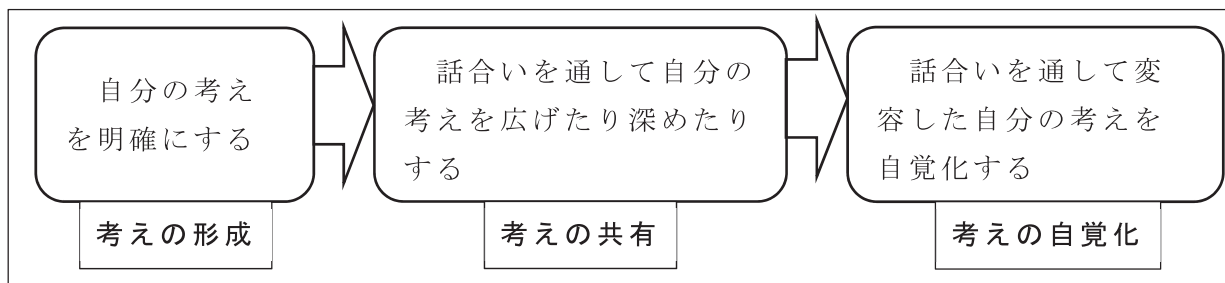
- (1) ガイド学習の充実
 - ア 思考をつなぐ話合い
 - イ ガイド力・フォロワー力の育成
- (2) 異学年による交流
 - ア 言語活動での交流
 - イ 振り返りの交流



Ⅱ 研究の実際

1 【視点1】「対話的な学び」に重点を置いた国語科授業づくり

自分の考えを互いに分かりやすく伝え合うためには、自分の考えを明確にする「**考えの形成**」、話し合いを通して自分の考えを広げたり深めたりする「**考えの共有**」、話し合いを通して変容した自分の考えを自覚化する「**考えの自覚化**」の三つの過程（資料3）を踏む必要がある。



【資料3 互いに分かりやすく伝え合うための過程】

「**考えの形成**」では、何について、自分の考えをもつのかを意識させ、理由を明確にもたせる必要がある。また、「**考えの共有**」では、自分の考えと話し合いの様子を可視化し、それを基に自分の考えを再考させる必要がある。さらに、「**考えの自覚化**」では、振り返る視点を与え、自分の考えの変容を自覚化させる時間を確保する必要がある。

そこで、単元を通して取り組むことと、1単位時間で取り組むことを次のように整理した。

(1) 単元を通した取組

ア 課題解決の過程となる言語活動

自分の考えの形成を図るために、課題解決の過程となる言語活動を設定し、子供が単元を通して「何を学ぶか」、目的意識をもって学習できるようにしている。

言語活動を設定する際には、育成を目指す資質・能力（指導事項）に即した単元のねらいを提示し、学習の見通しがもてるようにする。その際、資料4のようにモデルを提示することで、子供が「何を学ぶか」、より具体的にイメージできるようになる。

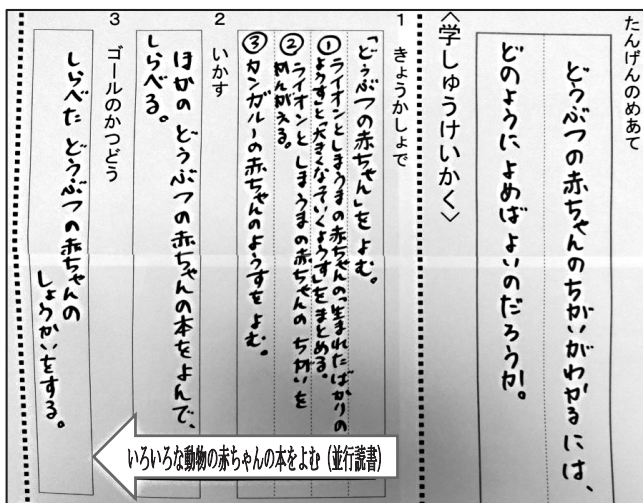
第3学年 まとまりをとらえて読み、感想を話そう 「言葉で遊ぼう」	
指導事項 文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと	
B: グッドモデル	A: エラーモデル
A は文章を読んで理解したことが書かれていない。 B は文章を読んで理解したことが書かれている。	
【資料4 モデルの提示】	

イ 思考を促すツール

(ア) 単元を見通す学習計画表

考えの共有を図るために、学習計画表（資料 5）を作成し、単元を通して、常時、学習の目的を確認し、本時の学習が単元全体のどこの部分と関連があるか見通すことができるようにしている。

また、全員が見える場所に掲げるだけでなく、子供一人一人のノートにも貼らせている。



【資料 5 第 1 学年 「どうぶつの赤ちゃん」の学習計画表】

(イ) 思考を可視化する全文掲載のワークシート

考えの共有を図るために、教材文全体を一枚の紙にまとめたワークシート（資料 6）を活用し、互いの考えの理由が一目で確認できるようにしている。

活用させる際には、子供たちに留意点（資料 7）を示し、線を引かせたり、印を付けさせたり、言葉を書かせたりして、思考の跡が可視化（資料 8）できるようにする。また、段落番号や行番号を書き込んでおくことで、話し合いを効率的に行い、「考えの形成」や「考えの自覚化」の時間確保につなげている。

- 初めて知る言葉や事柄には、サイドラインを引いて辞典や図鑑などで調べる。
- 指示語や接続語を丸で囲んで、文章全体のつながりに気を付ける。
- 文章の中で繰り返し使われている言葉に印を付け、線で結んで関連付ける。
- 課題に対する理由に、波線を引く。

【資料 7 思考を可視化するワークシートの使い方】



【資料 6 第 3 学年「こまを楽しむ」のワークシート】



【資料 8 思考の跡の様子】

ア 考えの形成

「Aか？Bか？」のように、課題に対する考えを子供が選択できるようにした課題の提示（Which型の課題提示）

提示の際には、「何を学ぶか」を明確にし、子供の考えを想定することが大切である。例えば、文章構成の意図を捉えさせたいときには、構成例のパターン（資料 9）を提示し、A か B かを選択させた上で理由を考えさせる。ここでは、子供が思考しやすいように、まずは「考え」を選択させ、次に「理由」を記入することができるように構成したワークシート（資料 10）を作成して用いている。

【資料 9 構成例のパターン】

生き物は門柱形

筆者の考えや考えの進め方とりえて
自分の考えを發表するにはどのように読めば
よいだろうか。

中では、筆者はどのような構成で、
考えを進めているだろうか。

筆者

事例

事例

進め

門柱形

例

外

内

考え

考えを進めている

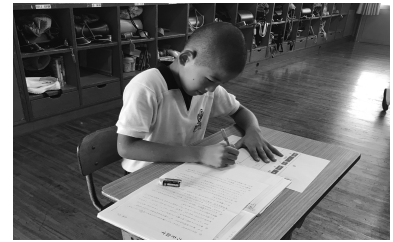
【資料 10 第 4 学年
「大きな力を出す」のワークシート】

イ 考えの共有

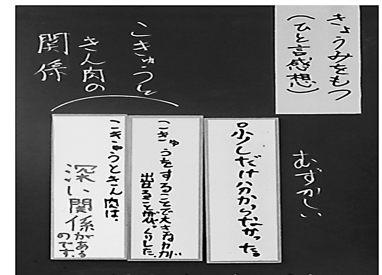
(ア) 思考の可視化

考えの共有を促すために、自分の考えや話し合いでの思考の跡を可視化し、互いの考えを共有できるようにしている。

自分の思考の跡を可視化できるように、短冊黒板やホワイトボードを活用して、一人一人の考えを書かせている(資料11)。また、話し合いでの思考の跡を可視化できるように、一人一人の短冊黒板やホワイトボードを視点ごとに分類させたり、順番に並べ替えさせたりして整理している(資料12)。



【資料 11 思考の可視化】

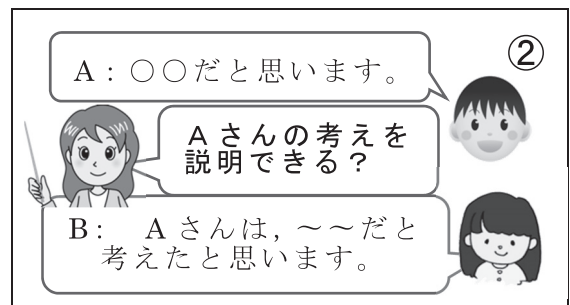


【資料 12 短冊黒板の活用】

(イ) 考えの再考を促す発問

話し合いにおいて、考えの共有を図るために、発問で考えをゆさぶったり、友達の考えを意識させたりして、自分の考えの再考を促している。

考えをゆさぶるには、子供の発表に対して、「どうして？」と考えの理由を聞き返す(資料 13-①)ことが大切である。また、友達の考えを意識させるには、「〇〇さんの考えを説明できるかな？」と学級全体に課題意識を広げる発問をし、子供に考えさせることが重要である。(資料 13-②)。

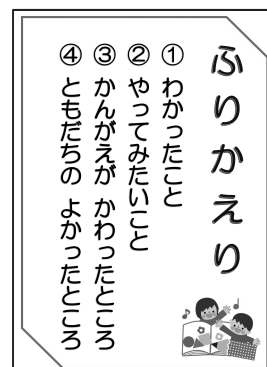


【資料 13 考えの再考を促す発問】

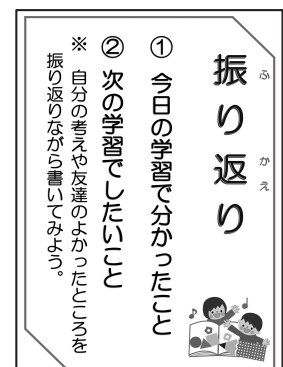
ウ 考えの自覚化

(ア) 変容を実感させる振り返り

話し合いを通して変容した自分の考えを自覚化させるために、毎時間、視点をもって振り返らせる時間を設定している。自分の考えの変容を実感させるために、分かったこと(学習内容や学び方)、次の学習でしたいこと(次時の見通し)等の視点(資料 14, 15)を発達の段階に応じて設けている。また、授業のねらいに合わせて視点を限定することもしている。



【資料 14 低学年】



【資料 15 中・高学年】

2 【視点2】複式学級の特徴を生かした指導

複式学級において、自分の考えを互いに分かりやすく伝え合うためには、その特質に応じて、ガイド学習や異学年による交流を一層充実させる必要がある。

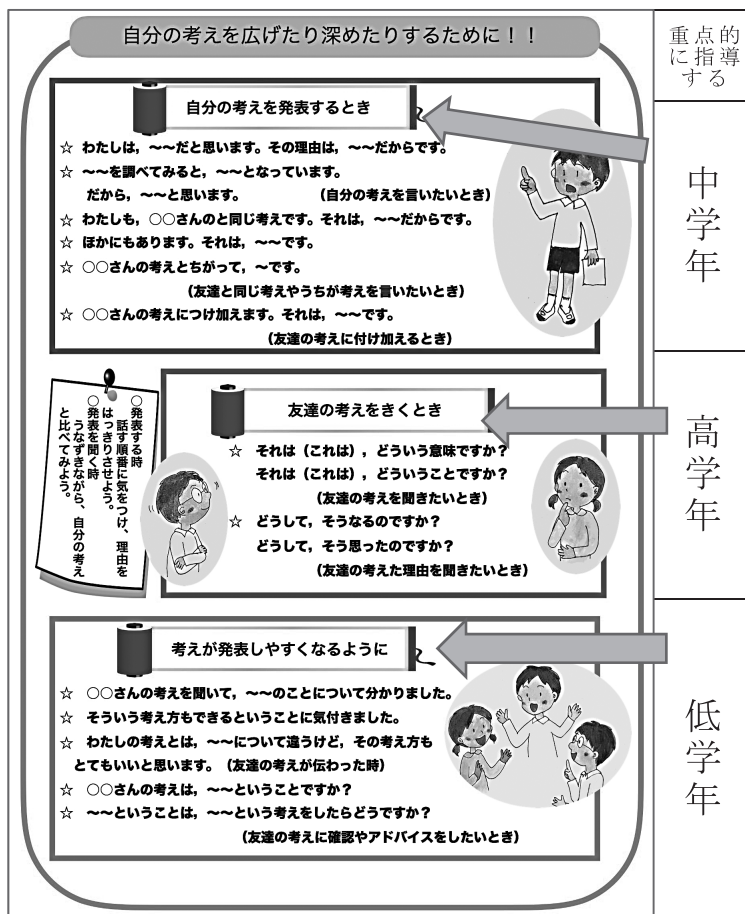
ガイド学習を充実させるためには、子供自身が考えのつなぎ方や自分の考えの説明の仕方を理解したり、ガイド力とフォロワー力を向上させたりする必要がある。異学年による交流を促すためには、相手意識を明確にもった言語活動や多様な考えを共有する振り返りの場を設定する必要がある。

(1) ガイド学習の充実

ア 思考をつなぐ話合い

ガイド学習を充実させるために、話合いの話型（資料16）を作成し、子供自身が考えのつなぎ方や自分の考えの説明の仕方を理解して活用できるようにしている。

その際、これまで研究してきたことを基に、「自分の考えを発表するとき」、「友達の考えをきくとき」、「考えが発表しやすくなるように」の三つに整理し、発達の段階に応じて重点的に指導することを決めて、作成したものを活用している。



【資料16 話合いの話型（中・高学年）】

イ ガイド力・フォロワー力の育成（「複式学習の手引き」の活用）

ガイド力・フォロワー力を向上させるために、これまで活用してきた「ガイド力・フォロワー力の系統表」（別紙資料）をさらに具体化した「この時期に、これを」（別紙資料）を基に、低学年から発達の段階に応じた指導を積み重ねている。

また、教師も「この時期に、これを」を活用し、自分の指導方法を自己評価することで、子供一人一人に応じたガイド力・フォロワー力の育成につながるようにしている。

(2) 異学年による交流

ア 言語活動での交流

複式学級の特徴を生かした指導を実現させるために、異学年同士が共通に取り組む言語活動を設定し、相手意識を明確にして学習できるようにしている。

言語活動の交流を行う際には、上の学年の子供は下の学年の子供に分かるような表現（話し方・書き方・きき方）を、下の学年の子供は上の学年の子供の表現に注目することを意識させることが重要である。



第3学年 「こまを楽しむ」

第4学年 「動いて、考えて、また動く」

3年生は、友達や4年生が「いいね」と共感するように感想を発表する言語活動。4年生は、友達や3年生が「なるほど」と納得するように考えを発表する言語活動。



第5学年 「生き物は円柱形」

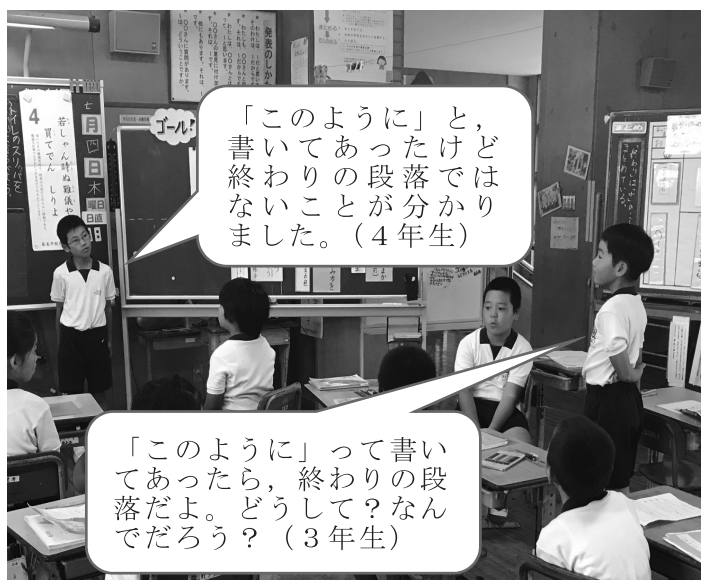
第6学年 「時計の時間と心の時間」

5年生は、筆者の考えの進め方についての自分の考えを6年生に発表する言語活動。6年生は、「時間」について、自分の考えの具体例を挙げながら5年生に発表する言語活動。

イ 振り返りの交流

多様な考えを共有できるようにするために、異学年同士と一緒に学習の振り返りができる場を設定している。

その際、両学年の指導事項をそろえることで、上の学年の子供は前学年の学習内容と関連付けて理解をより一層確かなものとし、下の学年の子供は、今後の学習の見通しや発展的な学習につながると考えている。



「このように」と、書いてあったけど終わりの段落ではないことが分かりました。（4年生）

「このように」って書いてあったら、終わりの段落だよ。どうして？なんだろう？（3年生）

第3学年 教材名「こまを楽しむ」

第4学年 教材名「動いて、考えて、また動く」

3年生は、文章の大体を捉える。4年生は、段落同士のつながりを捉える。「このように」について、これまでとは違った捉え方があることに気付いている3年生の様子。

Ⅲ 授業の実践例

1 単元を通した取組（第5・6学年の実践例）

- (1) 単元・教材名
筆者の考えの進め方をとらえ、自分の考えを発表しよう（教材名「見立てる」「生き物は円柱形」光村図書5年）
筆者の意図をとらえ、自分の考えを発表しよう（教材名「笑うから楽しい」「時計の時間と心の時間」光村図書6年）
- (2) 単元の目標（第5学年）
 - 筆者の考えと事例との関係を理解することができる。〈知識及び技能〉
 - 筆者の考えと事例の関係を基に文章構成を捉えて、要旨を把握することができる。〈思考力、判断力、表現力等〉
 - 筆者の考えや考えの進め方に関心をもち、自分なりの考えをもつことができる。〈主体的に学習に取り組む態度〉
- (3) 実際

過程	主な学習活動（第5学年） 8時間
構造と内容の把握①	1 単元のめあてと学習計画を立てる。 〈単元のめあて〉 筆者の考えの進め方をとらえ、自分の考えを発表するには、どのように読めばよいだろうか。 〈単元終末の言語活動〉 「生き物は円柱形」を読んで、6年生に自分の考えを発表しよう。 「見立てる」を読み、構成の大体をとらえる。 ※Which型課題Ⅰ（正しい構成図の選択） - 提示された二つの文章構成から正しいものを選び、理由を明確にしながら考える。 ○A① ②・③④⑤ ⑥ ×B① ②③・④⑤ ⑥
	2 「見立てる」を読み、筆者の考えや考えの進め方を捉える。 - 第3・4・5段落の役割（筆者の考えの進め方）について考える。 - キーワードに気を付けながら、「見立てる」の要旨を百字程度でまとめる。
構造と内容の把握②	3 「生きものは円柱形」を読み、構成の大体を捉える。 （【①初】－【②～⑩中】－【⑪終】） - 初めと終わりの役割について考える。 - 難解語句や、読み取る上で重要な語句を調べ、意味を理解する。
	4 中を二つに分け、筆者がどのような構成で考えを進めているか捉える。 ※Which型課題Ⅱ（正しい構成図の選択） 提示された二つの文章構成から正しいものを選び、理由を明確にしながら考える。 ×A① ②③・④～⑩ ⑪ ○B① ②～⑤・⑥～⑩ ⑪
精査・解釈①	5 第4・5段落の文章全体における役割を捉える。
形成①	6 筆者が一番伝えなかったことを話し合い、要旨を百字程度でまとめる。
共有②	7 筆者の考えや、筆者の考えの進め方（「生き物は円柱形」）に対する自分の考えをまとめ、友達に発表する。 〈思考力、判断力、表現力等〉 - 筆者の考えは、文章の「初め」や「終わり」に書かれていることが多い。 「中」には、どのような事例や理由を挙げているか考えればよい。（反論） - 要旨をとらえて、自分の考え（共感・疑問）を明らかにすればよい。
	8 筆者の考えや、筆者の考えの進め方（「生き物は円柱形」）に対する自分の考えを6年生に発表する。 学習したことを振り返る。

【視点1】(1)-ア 課題解決の過程となる言語活動

「大きな力を出す」を読んで、わたしは、筆者の考えの中心の、ふだん考えずにしている呼吸だが、呼吸を意識することで、筋肉は、より大きな力を出すことができる。というところに共感しました。

「なぜか」と、筆者が事例であげているように、自分たちも運動会のような引きの時にみんな「せえの」と声を合わせると、引くときに強くつなを引けたような気がしたからです。

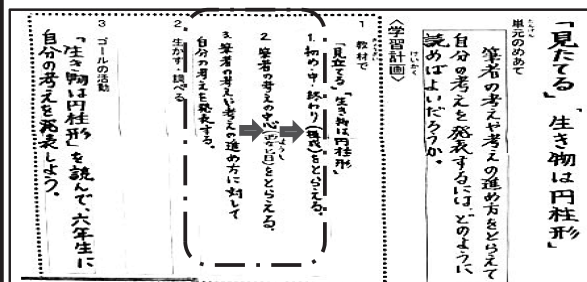
それは、ただつなを引くタイミングが合っているだけだと思っていました。この本を読んで、いっしょに声を出して息を吐くタイミングをそろえることで、一人一人の強い力を出せていたのかなだということが分かりました。

自分の考えの理由

筆者の考えに対する自分の考え

この単元では、筆者の考えや、筆者の考えの進め方に対する自分の考えを、6年生に発表する言語活動を設定した。このように**モデル文**を提示することで、子供が「何を学ぶか」をより具体的にイメージできるようにした。

【視点1】(1)-イ 単元を見通す学習計画表



子供たちに、自分の考えをモデル文のように発表させるために、**学習計画表**を用いて、ゴールから逆算して「何を学ぶか」を考えさせた。

- ① 筆者の考えや論の進め方に対して、自分の考えを発表する。
- ② 自分の考えをもつために、筆者の考えや考えの進め方を学ぶ。
- ③ ①のために、考えがどこに書かれているか、どのように文章が組み立てられているのか、構成を学ぶ。

また、毎時間学習計画表を確認させることで、本時の学習が単元全体のどの部分と関連があるかを意識しながら取り組ませた。

【視点2】(2)-ア 言語活動での交流

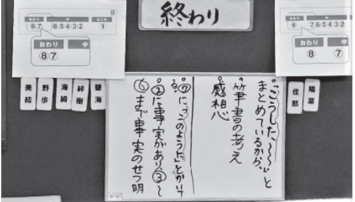
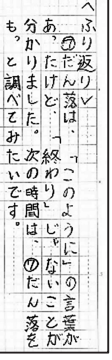


異学年での交流を行うことで、相手意識を明確にした活動に取り組むことができるようにした。5年生には、自分たちの考えに対して6年生がどのように感じるのかという意識をもって取り組ませた。

6年生には、自分の考えを伝えるために、分かりやすい事例（ここでは、「心の時間」に対して共感できる事例）を挙げるなど、5年生を意識した発表を行うようにさせた。

2 1 単位時間を通した取組（第3・4学年の実践例）

- (1) 単元・教材名
まとまりをとらえて読み、感想を話そう（教材名「言葉で遊ぼう」「こまを楽しむ」光村図書3年）
きょうみをもったところを発表しよう（教材名「大きな力を出す」「動いて、考えて、また動く」光村図書4年）
- (2) 目標（第4学年）
○ 双括型の特徴（文章の始まりと終わりの部分の両方で自分の考えを述べている）を生かして、教材文「動いて、考えて、また動く」を三つのまとまりで捉えることができる。（思考力、判断力、表現力等）
- (3) 実際

【視点1】 「対話的な学び」に重点を置いた国語科授業づくり	主な学習活動（第4学年）（3/8）	【視点2】 複式学級の特徴を生かした指導
(2)-ア（考えの形成）  ⑦段落と⑧段落のもつ役割の違いに気付かせるために、⑦段落と⑧段落が一つのまとまりか、それとも分かれるのか、Which型課題でどちらかを選択させる課題提示をした。選択した理由を明確にすることで、段落のもつ役割を考えることにつながるようにした。	1 前時を振り返り、単元のめあてを確認する。 2 第2教材の学習計画表を確認、単元のゴールの活動を捉える。 ○ 学習計画表で本時の学習を確認するとともに、単元の終末の活動やモデル文を捉えることで、「何を学ぶか」、見通しをもって学習に取り組ませる。 3 本時の学習のめあてをつかむ。 長い説明文で、まとまりをとらえるにはどうすればよいのだろうか。 4 課題を捉える（Which型課題提示）。 ○A ① ②③④⑤⑥⑦ ⑧ ×B ① ②③④⑤⑥ ⑦⑧ 5 学習の進め方を確認する。 ・ 本時の学習内容 ・ 本時の学習の進め方 ◎ ガイドには進行役をさせることで、間接指導時の学習がスムーズに進むようにする。 6 CDの範読を聞きながら、段落ごとに大事な一文を見付けたり、段落のもつ役割で内容を仲間分けしたりする。 ・ 大事な一文に線を引く。 ・ 段落のもつ役割（「考え」「事実」「説明」）に仲間分けする。	(1)-イ（ガイド力・フォロワー力の育成）  学習の流れに沿って、ガイドが学習を進め、フォロワーもしっかり指示に従って学習に取り組めるようにする。必要に応じて「ガイドの説明書」を活用し、ガイド力・フォロワー力の向上を図った。
(2)-イ（考えの共有）  自分の考えをネームカードで示し、その理由を発表する。話し合いの中で出てきた重要な言葉をホワイトボードに書くことで、思考の跡を可視化し、互いの考えを共有できるようにした。	7 課題の解決を図る。（個人→全体） ・ 提示された二つの文章構成から正しいものを選び、理由を明確にしながらかける。 ◎ Which型で構成図を選ぶときには、線を引いた文や段落のもつ役割を理由に選ばせるようにする。 ※話し合い ◎ 話し合いの際には、自分の考えの理由を明確にするとともに、互いの考えの理由について、質問し合うようにすることで、自分の考えを広げたり深めたりすることができるようにする。 8 双括型の構成になっていることを確かめ、その意図も捉える。 9 学習のまとめをする。 長い説明文でも大事な文を見付けたり、段落のもつ役割（「考え」「事実」「説明」）で仲間分けしたりすれば、まとまりをとらえやすい。	(1)-ア（思考をつなぐ話し合い）  C1：⑦段落は「終わり」に入ると思いますが。理由は、まとめる言葉「このように」が使われているからです。 C2：〇〇さんの考えとちがって、「終わり」は⑧段落だけだと思います。「こうした経験から」と筆者の考えをまとめて述べているからです。
(2)-ウ（考えの自覚化） 視点に沿って振り返りをさせることで、話し合いを通して変容した自分の考えを自覚化できるようにした。 C：⑦段落の「このように」は「終わり」ではなく「中」のまとまりで使われることもあることが分かりました。⑦段落のもつ役割をくわしく調べてみたいと思いました。 	10 学習を振り返る。 ※振り返り（異学年交流） ○ 振り返りの視点に沿って、本時の学習を振り返ることで、話し合いを通して、変容した自分の考えを自覚化させる。次時で「中」の各段落について詳しく読み、段落同士のつながりを捉える活動を行うことを意識させる。 ・ 一人で → 全体（3年生へ） 11 次時の学習の見通しをもつ。	(2)-イ（振り返りの交流）  両学年の指導事項をそろえ、異学年同士と一緒に学習の振り返りを交流することで、多様な考えを共有することができた。 C：3年生では、「このように」の言葉は、「終わり」のまとまりで使われていましたが、4年生ではそうでないこともあると言っていたので、どういふことか知りたいと思いました。

IV 研究の成果と課題

1 【視点1】「対話的な学び」に重点を置いた国語科授業づくり

成果	課題
○ 課題解決の過程となる言語活動を設定することで、目的意識をもって学び、自分の考えをより明確にもつことができるようになってきた。 ○ Which 型の課題提示で、全ての子供が考えをもつことができるようになってきた。また、理由を考える時間を確保できるようになり、他者に分かりやすく伝えることができる子供が増えてきた。 ○ 短冊黒板やホワイトボード等を活用し、思考の跡を可視化することで、互いの考えを共有したり、自分の考えを広げたり深めたりすることにつながってきた。 ○ 振り返る視点を発達の段階に応じて設定し、学習の振り返りを毎時間行ったことで、子供が学習内容をより自覚化したり、次時の学習を見通したりできるようになってきた。	△ 指導のねらいを明確にした言語活動の設定の在り方をさらに工夫しなければならない。 △ Which 型の課題が文章構成を捉えることに偏っていた。他の課題を考えさせる際にも活用する必要がある。 △ 学習内容や時間のまとまりを見通して、指導事項や学習活動の精選を行っていく必要がある。

2 【視点2】複式学級の特徴を生かした指導

成果	課題
○ 思考をつなぐ話合いの話型や複式学習の手引きを活用し、ガイド学習の充実を図ったことで、自分の考えをより分かりやすく伝え合うことができるようになってきた。 ○ 言語活動や振り返りで異学年による交流を行ったことで、分かりやすく伝えようとする意識が高まってきた。	△ 考えの広がりや深まりが子供一人一人のガイド力によって左右されることがある。子供一人一人に応じた指導をさらに充実させていく必要がある。 △ 国語科の学習で身に付けた力が、他教科等でより生かされるよう継続して取り組んでいく必要がある。 △ 異学年同士の交流が単元の終末の場面に偏っている。単元の導入や展開での交流、1 単位時間での効果的な交流の在り方を考えていく必要がある。

3 研究全体を通して

「対話的な学び」に重点を置いた複式国語科学習指導を通して、子供たちは自分の考えを互いに分かりやすく伝えることができるようになってきた。しかし、国語科でのこの学びが、他教科等に十分生かされているとは言い難い。そのため、他教科等の指導計画にも、言語活動を明記するなど、カリキュラム・マネジメントを充実させていく必要があると考える。また、複式学習指導における間接指導時に、子供たち主体の「対話的な学び」がさらに充実するように研究を深めていきたい。